月下詠嘆とその構図

――『伊勢物語』西の対の段における――

泉　紀子

一

昔、東の五條に大后宮おはしましける、西の対に住む人ありけり。それを、本意にはあらで心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。又の年の正月に、梅の花さかりに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見、見れど去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてとよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

（伊勢物語四段）

いつの間にか男が深く愛してしまった女は、東の五条の大后宮の西の対に住んでいたが、突然、男の前から姿を隠してしまった。一年後の春、梅の花盛り、月の照る夜、男は女と共に最後に過ごした〈時空〉を求めて西の対に出掛けていくが、深い疎外感と喪失感にうちのめされ、激しく泣いて、「月やあらぬ」の歌――藤原俊成が「かぎりなくめでたきなり」（古来風躰抄）と絶賛する――をよむ。

この『伊勢物語』四段における男の歌の意は確かに難解である。しかし、地の文に「立ちて見、ゐて見、見れど去年に似るべくもあらず」とあるように、また、一条兼良が『伊勢物語愚見抄』に、

歌の心は、月も昔の月にてはなきか。春も昔の春にてはなきか。それに見し折りのやうにもなく、よろづかはりはてたる心地のするは、いかにぞや。さるかとおもへば、我身ひとつは本のまゝにてありとよめり。是は人にはなれて後、我心の、おも

ひなしにかはらぬ物もかはりておぼゆる事也。此歌、心ふかくして、ふと心得がたきやうなり[1]

と注したように、男は、我が身以外のすべてが昨年と似て非なるものでしかない、と歌っているのである。

寛平六年（八九四）、大江千里によって『白氏文集』の詩句を題とした『千里集』が成ったが、金子彦二郎氏は、在原業平歌を始めとする六歌仙時代の歌を白詩とともに掲出されて、『千里集』以前の六歌仙時代にすでに白居易詩の「摂取醇化」が見いだせると述べられた。[2]そして、「月やあらぬ」の歌については、白居易詩の「花林好住莫顧頷　春至但知依旧春」（花林好住なれ顧頷する莫れ　春至らば但知れ旧に依るの春」（白氏文集・「別種東坡花樹両絶」其二）をその典拠として挙げられた。金子氏以後、この詩以外にも「花は（あるいは月は）往年と同じようなのに、人は変わって同じままにはとどまっていない」とよむ様々な白居易詩が、歌の典拠として、あるいは歌に影響を与えたとして、さらに指摘されている。

指摘された白居易詩の代表的な例を、以下に挙げてみよう。

・花林好住莫顧頷　春至但知依旧春（花林好住なれ顧頷する莫れ　春至らば但知れ旧に依るの春[3]）

（白氏文集・「別種東坡花樹両絶」其二）

・西掖垣中今日眼　南賓楼上去年心　花含春意無分別　物感人情有浅深（西掖の垣中今日の眼　南賓の楼上去年の心　花は春意を含んで分別なく　物は人情を感ぜしめて浅深有り[4]）

（同・「西省対花　憶忠州東坡新花樹　因寄台東楼」）

・存亡感月一潸然　月色今宵似往年　何処曽経同望月　桜桃樹下後堂前（存亡月に感じて一に潸然たり　月色今宵往年に似たり　何の処か曽て経て同じく月を望める　桜桃樹下後堂の前[5]）

（同・「感月悲逝者」）

・欲入中門涙満巾　庭花無主両廻春　軒窓簾幕皆依旧　只是堂前欠一人（中門に入らんと欲して涙巾に満つ　庭花主無くして両び春を廻らす　軒窓簾幕皆旧に依る　只是れ堂前一人を欠く[6]）

（同・「重到毓村宅有感」）

しかし、たとえば金子氏が指摘された白居易詩について言うと、小島氏もすでに述べられたように、「花」に自然の永遠不変や継続性を象徴させ、花と対比的な人事のうつろいやすさをよんだ、初唐詩人劉希夷詩「代白頭吟」の「今年花落顔色改　明年花開復誰在……年年歳歳花相似　歳歳年年人不同」に、より「月やあらぬ」の歌

との関わりの強さを感じるのである。[7]

『劉希夷集』は、文献上では、空海が嵯峨天皇に献上した弘仁二年（八一一）六月二七日（遍照発揮性霊集・「書劉希夷集献納表一首」）に伝来しており、唐代詩に多大な影響を与えた「代白頭吟」は、日本においても盛んに受容された。

たとえば、嵯峨御製の「明月年年不改色　看人歳歳白髪生（明月年年色を改めず　看る人歳歳白髪生ふ）」（文華秀麗集・「和内史貞主秋月歌」）は、劉希夷詩における「花」と「人」との対比を、「月」と「月を看る人」の対比に置き換えてよんだものであろう。

男の「月やあらぬ」の歌は『古今集』に在原業平歌として所収されており、業平歌であることが確かであるが、以下に掲げた、仁明天皇の一周忌に際して、天皇の楽しみにしていた藤原良房邸の桜の花が今春咲くのにその天皇は不在であることを「花是人非（花は人ではない）」と嘆いた良房の言葉[8]や、同じく良房の、娘染殿后と娘の子で立太子した惟仁親王を年々歳々咲き続ける桜にたとえ、歳々年々老いゆく我が身と対比してよんだ「年ふれば」の歌は、業平の時代において「代白頭吟」の表現や概念が一般化、類型化されていたことを示している。

大臣恨曰。先皇所期之春。今日是也。春来依期。仙去不帰。花是人非。不可堪悲（春の来たるは期に依りてなり。仙去りて帰らず。花は是人に非ず。悲しみに堪ふべからず）

（文徳実録・仁寿元年〈八五一〉三月十日条）

染殿后の御前に花がめに桜の花をささせ給へるを見てよめる　前太政大臣

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

（古今・春上・五二）

また、「月やあらぬ」の歌に関わるとして指摘されてきた他の多くの白居易詩についても、その概念や表現をさかのぼれば「代白頭吟」にゆきあたるのではないかと思われるのであり、『伊勢物語』四段においても、前掲のような白居易詩とともに、「代白頭吟」との関わりは、心にとめておかなければならないだろう。

ただし、『伊勢物語』四段の男の歌の場合は、冒頭でも述べたように、自然のうつろい（男にとってはそのようにしか思われない）と対比される我が身の不変をよんでいるのであって、先に掲げた嵯峨御製、業平と同時代の良房の言葉、良房の歌等の場合とは異なって、劉希夷詩の、また、白居易詩も含めて劉希夷詩を踏まえた多くの中国詩や日本漢詩の流れを受けつつも、あえてそれらとは逆の表現方法をとっていることに注意すべきである。なぜなら、前述のよ

うに「代白頭吟」的な表現や概念が一般化、類型化されていた当時の状況においてだからこそ、通常とは逆の表現が、かえって強いインパクトを人に与えることができたと思われるからである。

これは、「月やあらぬ」「春やあらぬ」と呼びかけて「月」と「春」とを擬人化した時に、「月」や「春」をも「人」と同じように常なきものとして表現することができたということであろうか。

また、下句の「我が身ひとつ」については、

淵瀬ともいさや白波たち騒ぐわが身ひとつはよる方もなし

（後撰・恋一・五二六・読人不知）

おほかたの我が身ひとつのうきからになべての世をも怨みつるかな

（拾遺・恋五・九五二・紀貫之）

のように、恋の疎外感、孤独感の表現であって、『伊勢物語』四段の場合も、去年の春と変わらぬ女への思いのままに、去年と同じように西の対にやってきた男の、すべてにとり残された絶望感を、下句がきわめて端的に表現しているのである。

二

五条のきさいの宮の西の対にすみける人に、本意にはあらでものいひわたりけるを、正月の十日あまりになむ、ほかへかくれにける。あり所は聞きけれど、え物も言はで、又の年の春、梅の花さかりに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対に行きて、月のかたぶくまであばらなる板敷にふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

（古今・恋五・七四七）

前章では、「月やあらぬ」の歌が、一般的な概念や類型とは逆の表現方法で自然と人事を対比的によんでいることを述べた。加えて、この歌の主意が、重出する『古今集』に恋歌として収められているように、春夜、花盛りの、月下における愛の喪失の嘆きであることを重視したい。このように考えるならば、典拠や影響を考える詩について再度の検討が必要となるのではないか。

たとえば、『文華秀麗集』艶情部所収の巨勢識人詩「奉和春閨怨」には、『伊勢物語』の場合と同様な愛の嘆きがよまれている。

・階前花積妾不掃……愁向高楼明月孤（階前に花積もれど妾は掃はず……愁へて高楼に向かへば明月孤りなり）

（文華秀麗集・艶情・巨勢識人「奉和春閨怨」）

さらに識人詩と同様に、春夜、花盛り、月下における愛の喪失の嘆きをよんだ例が、中国六朝の宮体詩集『玉台新詠』（以下『玉台新詠箋注』使用）に多く見いだせることに注目したい。

・昆明夜月光如練　上林朝花色如霰　花朝月夜動春心　誰忍相思不相見（昆明の夜月光練の如く　上林の朝花色霰の如し　花朝月夜春心を動かす　誰か相思ひて相見ざるに忍びん）
（玉台新詠・湘東王繹「春別応令四首」其一）

・花樹含春叢　羅幃夜長空　風声随篠韻　月色与池同（花樹春叢に含まる　羅幃夜長に空し　風声篠に随ひて韻き　月色池に同じ）
（同・皇太子簡文「春宵」）

・閨閣行人断　房櫳月影斜　誰能北窗下　独対後園花（閨閣行人断え　房櫳月影斜めなり　誰か能く北窗の下　独り対せん後園の花）
（同・何遜「閨怨」）

・花月分窗進　苔草共階生（花月窗を分けて進み　苔草共に階に生ず）
（同・陰鏗「班婕妤怨」）

また、識人詩の詩題「奉和春閨怨」にある「春閨」の語は、識人詩以外にも『文華秀麗集』艶情部所収詩の詩題や詩語に、「奉和春閨怨」（朝野鹿取・菅原清公）「誰念春閨愁怨情」（朝野鹿取「奉和春閨怨」）のように見いだせるのだが、同時に、『玉台新詠』の詩題や詩語にも頻出する語なのである。

詩題…「春閨情」（皇太子簡文）・「春閨思」（蕭子顕）・「春閨有怨」（王僧孺）

詩語…「春閨散晩香」（皇太子簡文「晩景出行」）・「羞使春閨空」（同「和湘東王名士悦傾城」）　「春閨不能静」（江洪「詠薔薇」）・「春閨人独眠」（范雲「思帰」）他

同じ六朝詩文集の『文選』に「春閨」が一例も見いだせないことを合わせて考えると、識人詩をはじめとして『文華秀麗集』所収の艶情詩に『玉台新詠』の影響は大きく、また、『古今集』の業平歌や『伊勢物語』四段は、きわめて『玉台新詠』的なテーマと表現を有していると言えるだろう。

ただし、識人詩も『玉台新詠』詩も、男の作者が女の立場からよんだものであるのに対して、業平歌や『伊勢物語』の場合は男が男の立場からよんだものである。この、女を失った男が月に照らされて愛の喪失を嘆く、言わば男による〈月下詠嘆〉とその〈構図〉に、伝来以後、我が国の文芸に多大な影響を与えた白居易詩「長恨歌」の、玄宗皇帝が月下に亡き楊貴妃を偲ぶ「行宮見月傷心色」の詩句の介在を考えてよいのではないだろうか。

元和元年（八〇六）に作られた「長恨歌」は、『文徳実録』によ

ると、承和五年（八三八）に「元白詩筆」として伝来したことになるが、『文華秀麗集』所収巨勢識人詩の「空床春夜無人伴　単寝寒衾誰共暖（空床の春夜人の伴ふなく　単寝の寒衾誰と共にか暖めむ）」（「奉和春閨怨」）の句が、「長恨歌」の「夜半無人私語時（夜半人なく私語の時）」や「翡翠衾寒誰与共（翡翠の衾誰と共にせむ）」を踏まえているとすれば、小島憲之氏が述べられたように、承和五年以前に、何らかの形や方法で伝来した可能性がある。[11]

我が国での和歌世界における「長恨歌」享受の特徴的なありようとして、以下に例を挙げたように、玄宗皇帝の亡き楊貴妃への思いを自然の景物とともによんだ詩句を「あはれなること」として好む傾向があり、それらの詩句は、玄宗皇帝がひとり庭を見る〈構図〉を自ら構成し、歌は、その〈構図〉の中の、玄宗皇帝の立場からの〈詠嘆〉としてよまれるのである。

長恨歌の屏風を亭子院のみかどかかせ給ひて、その所所よませたまひける

（みかどの御になして）

もみちばにいろみえわかず散るものは物思ふ秋の涙なりけり

（伊勢集・五二）

かへりきて君おもほゆるはちすばに涙の玉とおきゐてぞ見る

（同・五四）

（或人の、長恨歌楽府のなかに、あはれなることをえらびいだして、これが心ばへを二十首よみておこせたりしに）

行宮見月傷心色

おもひやる心もそらになりにけりひとりありあけの月をながめて

（大弐高遠集・二五七）

（同長恨歌に、あはれなる事ありしをかきいでて、歌十六をよみくはへてやる）

帰来池苑皆依旧

からころもなみだにぬれてきてみればありしながらのあきはかはらず

（同・二七九）

（長恨歌、当時好士和歌よみしに、十首）

行宮見月

みるままに物思ふことのまさるかなわが身よりいづる月にやあるらん

（道済集・二四四）

すでに『伊勢物語』四五段の成立には、「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然　孤燈挑尽未能眠」の詩句の介在が考えられているが、我が国における盛んな「長恨歌」の享受や、右に例を挙げた藤原高遠や源道済の「行宮見月傷心色（行宮に月を見れば心を傷ましむる色）」に関する句題和歌の存在を考えると、『伊勢物語』四段の場合においても、「長恨歌」のこの句が章段の成立に介在している可能性は高いと言えるのではなかろうか。

ただし、ここで押さえておかなければならないのは、「長恨歌」が『玉台新詠』的表現に拠っていることである。

たとえば「夕殿螢飛思悄然　孤燈挑尽未能眠」の句の場合、「螢」の語は「今夕螢火飛」（呉均「昼蟬已傷念」）「流螢飛復息」（謝朓「玉階怨」）「簾外隔飛螢」（何遜「閨怨」）「秋風驅乱螢」（皇太子簡文「秋閨夜思」）等、枚挙にいとまないほどに『玉台新詠』的な語といってよいが、そのほか「夕殿」や「孤燈」の語も、「夕殿下珠簾」（謝朓「玉階怨」）「孤燈損玉顔」（江淹「征怨」）「孤燈曖不明」（沈約「夜夜曲」）等、『玉台新詠』に見いだせる。

そして、当該の「行宮見月傷心色」の句の場合も、『玉台新詠』には、先に挙げた例以外にも、「昭昭素明月　輝光燭我牀」（魏明帝「楽府詩二首」其一）「清風動帷簾　晨月燭幽房」（張華「情詩五首」其三）「楼上徘徊月　窗中愁思人」（庾肩吾「和徐主簿望月」）「明月照高楼　流光正徘徊」（曹植「雑詩五首」其一）「秋風動桂樹　流月揺軽陰」（柳惲「長門怨」）等のように、月下における愛の喪失をよんだ例が頻出し、「月が心を傷ませる」という表現も、

・秋風嫋嫋入曲房　羅帳含月思心傷（秋風嫋嫋として曲房に入り羅帳月を含みて心の傷むを思ふ）　（湯恵休「秋風歌」）

・明月雖外照　寧知心内傷（明月外を照らすと雖も　寧ぞ知らんや心内に傷むを）　（沈約「古意」）

のように『玉台新詠』に見いだせるのである。

さらに、「長恨歌」伝来の証拠として小島氏が挙げられた識人詩「奉和春閨怨」が、『玉台新詠』に頻出する「花月夜における愛の喪失の嘆き」のテーマとその表現、また、「春閨」の詩題を有していることについては、前述の通りである。

つまり、白居易が「長恨歌」製作に際して『玉台新詠』の、あるいは『玉台新詠』的表現に拠ったらしいことが推察されるとともに、我が国で好尚された「長恨歌」の詩句や表現はきわめて『玉台新詠』的であって、『伊勢物語』四段に「長恨歌」が介在するということは、すなわち『玉台新詠』的世界につながることでもあったことが、あらためて確認されるのである。

去秋三五月　今秋還照房　去秋三五の月　今秋還た房を照らす
今春蘭蕙草　来春復吐芳　今春蘭蕙草　来春復た芳を吐く
悲哉人道異　一謝永銷亡　悲しい哉人道は異り　一たび謝すれば銷亡す
（　略　）
（同・沈約「悼亡」）

このように、潘岳詩であれ沈約詩であれ、少なくとも『玉台新詠』所収の悼亡詩は、閨怨詩と共通する表現を有している。また『玉台新詠』的であると先に述べた「長恨歌」の、玄宗皇帝が楊貴妃を偲ぶ〈詠嘆〉とその〈構図〉も、男が失った女を追憶し死別を嘆く点においては、悼亡詩の流れにあると言えよう。

我が国の和歌世界において、「悼亡」歌の嚆矢ともいうべきは、軽路の妻の死を悼み「泣血哀慟」して作った柿本人麿の挽歌である。

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年さかる
（万葉巻二・挽歌・柿本人麿・二一一・二一四）

人麿は『万葉集』に多くの挽歌を残しており、それらの挽歌に潘

三

『玉台新詠』所収詩は、男の作者が女の立場になって愛の喪失を嘆く閨怨詩が大方であるが、「長恨歌」のように男が男の立場から妻を悼んで追憶し詠嘆する詩のジャンルに悼亡詩がある。現存の限りでは晋の潘岳作がもっともはやく、潘岳の「悼亡詩三首」が『文選』に、うち二首が『玉台新詠』に収められている。

『玉台新詠』には、潘岳以外に沈約の悼亡詩も一首収めるが、これらの悼亡詩の表現は閨怨詩とほとんど変わらず、〈月下の詠嘆〉とその〈構図〉も同じように見いだせるのである。

皎皎窓中月　照我室南端　皎皎たる窓中の月　我が室の南端を照らす
（　略　）
歳寒無与同　朗月何朧朧　歳寒与に同じうする無し　朗月何ぞ朧朧たる
展転眄枕席　長簟竟牀空　展転して枕席を眄(み)るに　長簟牀に竟りて空し
（　略　）
（玉台新詠・潘岳「悼亡詩二首」其二）

岳の悼亡詩や『芸文類聚』巻三四の「哀傷」に収める潘岳の悼亡賦の影響があることについては、中西進氏[10]や辰巳正明氏[11]によってすでに指摘されている。また、人麿の「去年見てし」の歌と、前掲『玉台新詠』所収の沈約「悼亡」の「去秋三五月　今秋還照房……悲哉人道異一謝永銷亡」との類似については、小島氏が明らかにされている[12]。

確かに人麿歌「去年見てし」の挽歌と沈約の悼亡詩とには、今年の月に照らされながら昨年の月を追憶し、妻の不在を一層強く思って嘆く表現のありように強い共通性が感じられるが、この共通性は、やはり中西進氏が人麻歌について、

当面の歌はこれ（伊勢物語第四段歌「月やあらぬ」）ときわめてよく似ている。遠く去っていった女への物思い、その茫然とした心情は今の「いや年さかる」という口ぶりの中に如実に生きているではないか[13]。

と指摘されているように、『伊勢物語』四段にも見いだせるものなのである。

つまり、潘岳や沈約の悼亡詩の影響を受けた人麿の妻の死を悼む挽歌が、「代白頭吟」的な概念とその表現、また『玉台新詠』の閨怨詩のテーマやその表現と関わりつつ伝来し、さらに、おそらくは「長恨歌」を直接の契機として、業平歌へ、『伊勢物語』四段へとつながっていったと考えられるのではないだろうか。

あるいは、人麿歌に見られたような〈月下詠嘆〉と〈構図〉が人麿以降も繰り返され、「長恨歌」を大きな契機として再生産されたのが『伊勢物語』の四段であった、と考えてよいかもしれない。

そして、『伊勢物語』に成立したこの〈詠嘆〉と〈構図〉は、さらに『源氏物語』にも引き継がれ、桐壺更衣を失った桐壺帝の、また、紫上を失った源氏の〈詠嘆〉と〈構図〉として、繰り返され、再生産されているのではなかろうか。

ただし、『伊勢物語』では、前述したように当時の類型とは逆の表現方法で〈詠嘆〉したのであり、加えて、地の文に「ほかにかくれにけり」とあるように、女との別離を死別に限定せず、よむ者の解釈に任せるという〈方法〉をとっており、これが後に様々な解釈を生み出していったことは周知の通りである。

さて、『古今集』業平歌の詞書には『伊勢物語』とほとんど同じ内容が記されているが、この詞書について、

主要な叙述については、ほとんど一致しているのであるが、その一致する叙述は物語としてなら納得されるが、勅撰集の詞書として見れば異常な感じがする場合が多い。たとえば、場所を「五条の后の宮」と何故特定しなければならなかったのか。また「本意にはあらで」と何故弁明しなければならなかったのか。

また仮にも五条の后の宮の御殿であるのに、女主人が居ないというだけで、「あばらなる」状態になっていたというのもおかしい。さらにその五条の后の宮の御殿に、男がのこのこと入って行って、朝まで簀子（縁側）に臥していたというのも 現実的でない。[14]

と片桐洋一氏が述べておられるように、歌の詠歌状況の設定や説明には虚構性が感じられる。

なぜ「五条の后の宮」の「西の対」なのか、なぜ「本意にはあらで」なのか。「西の対」については、あるいは張生と鶯々との西廂での恋を語る元稹の「鶯々伝」に関わるかもしれないが、今の所よくわからない。

ただし、『古今集』と『伊勢物語』とに共通する、荒れ果てた部屋で追慕し詠嘆するという設定は、潘岳詩や沈約詩、また『玉台新詠』所収のその他の閨怨詩に見いだせる類型であって、以下に挙げるように、人の気配のない部屋や床には塵が掩い、階段には草苔が生じ、庭には草が生い茂り、その孤独な姿を月が照らすのである。

（略）

牀空委清塵　室虚来悲風　　牀空しくして清塵委（くは）し
室虚しくして悲風来る

独無李氏霊　髣髴覩爾容　　独り李氏の霊のごとく　髣髴として爾の容を覩るなし

撫衿長歎息　不覚涕霑胸　　衿を撫でて長く歎息し　覚えず涕胸を霑す

（略）

（玉台新詠・潘岳「悼亡詩二首」其二）

（略）

屏筵空有設　帷席更施張　　屏筵空しく設くる有り　帷席更に施帳す

遊塵掩虚空　孤帳覆空牀　　遊塵虚空を掩ひ　孤帳空牀を覆ふ

万事無不尽　徒令存者傷　　万事尽きざるなし　徒に存者をして傷ましむ

（同・沈約「悼亡」）

寧顧空房裏　階上緑苔生　　寧そ顧みん空房の裏　階上に緑苔生ずるを

（同・劉遵「従頓還城応令」）

房櫳無行迹　庭草萋已緑　房櫳に行迹なく　庭草萋として已に緑なり
（同・張協「雑詩一首」）

また『伊勢物語』には、『古今集』の詞書にはない「立ちて見、ゐて見、見れど去年に似るべくもあらず」のように、男のさまよい、うちまどう様子を語る表現があるが、この表現が、以下に挙げるような『玉台新詠』に頻出する「徘徊」「彷徨」「徙倚（行きつもどりつする）」等の語に相当すると考えるならば、もとより『玉台新詠』的表現に拠って成った虚構的な歌語りが、『伊勢物語』では『玉台新詠』の、あるいは『玉台新詠』的表現に拠って、さらに敷衍されていると言えるのではなかろうか。

・東西安所之　徘徊以彷徨（東西安くに之く所ぞ　徘徊して以て彷徨す）
（玉台新詠・魏明帝「楽府二首」其一）

・憂愁不能寝　攬衣起徘徊……出戸独彷徨　愁思当告誰（憂愁して寝る能はず　衣を攬りて徘徊す……戸を出でて独り彷徨し愁思当に誰にか告ぐべき）
（同・枚乗「雑詩九首」其九）

・飄飄不可寄　徙倚徒相思（飄飄として寄すべからず　徙倚して徒らに相思ふ）
（同・徐幹「室思一首」）

・挾瑟叢台下　徙倚愛容光　佇立日已暮　戚戚苦人腸（瑟を挾む叢台の下　徙倚して容光を愛しむ　佇立して日已に暮れ　戚戚として人の腸を苦しましむ）
（同・沈約「古意」）

以上のように、『伊勢物語』四段は、人麿挽歌や悼亡詩の流れ、そして「長恨歌」の介在をも含めて、まさに『玉台新詠』的世界を構成しており、月下の〈構図〉における男の立場からの、愛の追憶と喪失の〈詠嘆〉を語る歌物語である。

ただし、その〈月下詠嘆〉と〈構図〉は、物語の語り手が「昔……」のように昔語りとして語り始めるや、『伊勢物語』全体の主題であり語りの方法であると片桐洋一氏が明らかにされたところの、〈失われた時を惜しみ回想する〉という白居易詩の〈方法〉[15]とその表現に、たちまちに覆われてゆくのだと言えるだろう。

注

（1）片桐洋一氏『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（明治書院　昭56）所収

(2) 金子彦二郎氏『平安時代文学と白氏文集　―句題和歌・千載佳句研究篇―』第二第一章第一節・二「千里以前の諸歌人の和歌」(培風館　昭18)『増補平安時代文学と白氏文集　―句題和歌・千載佳句研究篇―』(芸林舎　昭52)所収

(3) (2) に同じ

(4) 不破裕子氏「伊勢物語第一次章段考」(『目白国文』昭57・2)

(5) (4) に同じ

(6) 片桐洋一氏『伊勢物語の新研究』第一篇第二章「伊勢物語と白詩　―その方法と本質―」(明治書院　昭62)

(7) 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　下』第七篇第二章「平安初期に於ける詩」(塙書房　昭40)

(8) 渡辺秀夫氏は御論『平安朝文学と漢文世界』第七章「『伊勢物語』における漢詩文受容」(勉誠社　平3)において、劉希夷詩の「代白頭吟」が我が国では一種の自然観照の類型として定着し、『文徳実録』の良房の言葉は、この種の類型感情の風俗的な一般性を物語るものだと述べておられる。

(9) (7) に同じ

(10) 中西進氏『万葉集の比較文学的研究』二作家論第五章「人麿と海彼」(桜楓社　昭38)

(11) 辰巳正明氏『万葉集と中国文学』二・第七章「人麿の挽歌と哀傷詩文」(笠間書院　昭62)

(12) 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　中』第五篇第五章「万葉集と中国文学との交流」(塙書房　昭39)

(13) 中西進氏『中西進　万葉論集第七巻』柿本人麿V「別離」(講談社　平7)

(14) 片桐洋一氏『古今和歌集全評釈　中』(講談社　平10)

(15) (6) に同じ

(いずみ　のりこ／本学非常勤講師　羽衣学園短期大学教授)